

龍神様のかりそめ花嫁
離縁の雨と真の婚姻

碧月あめり Ameri Aotsuki



アルファポリス文庫

このところ、天気がぐずついている。

今にも雨が降り出しそうな薄墨色うすすみの空を見上げ、葵あおいは憂鬱ゆううつげにため息を零した。

濡羽色ぬれはの艶やかな長い黒髪、白雪のような肌みに、御空色みそらの瞳。縁側に浅く腰掛けて天を仰ぐ葵の憂いを帯びた横顔は、今日も儂まろく美しい。

もうすぐ十六になる葵は、幼子の頃から美雲神社みくもを出たことがない。

美雲神社には一つ目の龍神が祀まつられている。その姿は恐ろしく、見る者すべてを震え上がらせるほどだという。

葵は、その一つ目の龍神の花嫁だ。

そして、まもなく離縁する。

離縁の雨が降りやむ、そのあとに――

龍神の花嫁

龍の眷属けんぞくと言われる竜堂家りゅうどうか。その分家に生まれた葵が美雲神社の龍神の花嫁になったのは、三つのときだった。

【御空色の瞳を持って生まれた女の子が三つになる年、美雲神社の一つ目の龍神——
天之御蔭神様あまのみかげのかみに嫁がせる】

これは、竜堂家が代々受け継いできた古い習わしだ。

事の始まりは定かではない。

古い文献によると、その昔、この土地を治めようとした竜堂家に神託があり、龍神と竜堂家との間で花嫁についての契約が結ばれたそうだ。

代々花嫁になるのは、御空色の瞳をした女の子に限られる。この特別な瞳の色が、選ばれた者の徴しるしらしい。

女の子が三つになると、龍神に神力を捧げる花嫁として美雲神社に送られる。それ以降、花嫁が現世の人間と関わりを持つことは許されない。

美雲神社の敷地の奥には、神主と竜堂家の一部の人間しか知らない古い民家があり、花嫁はそこに隔離されて暮らす。生家から付けられる世話係はいるが、その者たちがおこなうのは食事や着替え、掃除など花嫁の身の回りに関わることのみ。それ以外では花嫁と一線を引き、不要な交流は禁じられている。

美雲神社の龍神は、そうやって俗世と離れて暮らす無垢な花嫁から土地や人々を守るための神力を得た。

美雲神社のある土地は、放っておけば日照りが続いてしまうため、龍神の力で雨を降らせてやらなければならない。

契約が結ばれたばかりの頃は、土地の気候が不安定だったうえに、人々の諍いさかいも多く、花嫁から得られる神力は龍神の助けになった。

花嫁を捧げた竜堂家はその見返りとして、富と権力、子孫繁栄が約束された。

ただし、花嫁が龍神に神力を捧げることができるとされてはいる年は十六までだ。それをすぎると、花嫁が捧げることのできる神力は、徐々に失われていくらしい。

花嫁が十六歳の誕生日を迎えると、不思議なことに大量の雨が降る。

これは龍神が花嫁を現世に戻す合図で、「離縁の雨」と呼ばれている。

雨は花嫁の十六の誕生日から三日三晩降り続いたのちに、四日目の朝に嘘のようにぴたりとやむ。

雨がやむと、天は美しい御空色に晴れ、龍神から離縁された花嫁は現世に帰ることになる。

現世に帰った花嫁は、竜堂家の男子の中で自分と一番血縁の遠い者と婚姻関係を結び、次の龍神の花嫁となる女兒を生まなければならぬ。

それが龍神の花嫁として生まれた者の定めで、もう何代目になるかもわからない花嫁として美雲神社に連れてこられた葵も、その習わしから逃れることを許されていないかった。

龍神の花嫁などというと聞こえはいいが、竜堂家にとって、花嫁は権力保持のための捨て石のようなものだ。

当代の花嫁である葵の十六の誕生日は三日後。

習わし通りであれば、誕生日の朝から三日間大量の雨が降り、その翌日に、龍神との離縁が成立する。

(ぐずつく空は、花嫁が龍神様に離縁される日が近付いていることを現世に報せているのかしら)

虚ろに天を仰いで考える葵だったが、

「まさか、そんなはずがないわね」

やがて、ふっとため息を吐いてひとりごちた。

龍神に捧げる花嫁も離縁の雨も、竜堂家に伝わるただの因習。

その証拠に、三つで花嫁として美雲神社に嫁いできた葵は、これまでにただの一度も一つ目の龍の神様などお目にかかったことがない。

それでも、契約が結ばれた頃の花嫁は、美雲神社の池の奥にある滝のそばの社で龍神のための祈りを捧げていたと聞く。

だが、もう何百年も前から、花嫁が祈ることはなくなった。時の流れとともに土地の天候が安定し、花嫁が祈らなくても生活に困らないほどの雨が降るようになったのだ。

頻繁に起きていた土地の人々の諍いも、竜堂家が地位を確立していくにつれて減っていった。

そのことによって目に見えない龍神への敬意は次第に薄れ、花嫁に祈らせる必要性を感じなくなっていたのだろう。

美雲神社の神主には今でもときどき龍神の神託が下りるそうだが、その真偽もさだかではない。

龍神の花嫁も、十六歳の誕生日のあとの離縁も、すべて形式上のこと。

現在、竜堂家が侯爵の地位にあるのは、龍の眷属であることが認められているからで、それを周囲に知らしめるために、古い因習はずっと繰り返し返されているのだ。

ただひとつ、花嫁の十六歳の誕生日のあとに必ず雨が降り続けるということだけは不思議だが、それだって偶然が重なっただけのことで、ほんとうは龍神の力によるものではないのかもしれない。

葵はそんなふうに感じていたし、竜堂家の人間が本気で龍神の存在を信じているわけではないことにも、薄々気付いていた。

だが、信じているいまいにかかわらず、古い因習というものをやめることは難しい。聞くところによると、その昔、御空色の瞳の女の子が生まれたときに、その母親が赤ん坊を連れて逃げたことがあるそうだ。彼女は大切な娘を龍神の花嫁になどしたくなかった。

するとその年、竜堂家が統治する村は、今までになかったくらいの大旱魃たいかんぱに見舞われた。

そのことと龍神との因果関係は不明だが、以来、万が一のことを恐れて、御空色の瞳の花嫁は美雲神社の龍神のもとへと送られる。

十六歳で離縁されることを条件に。

空を見飽きた葵が散歩にでも行こうかと腰を上げると、

「葵様。失礼いたします」

後ろの襖ふすまが開いて、世話係のシノが部屋に入ってきた。

シノは、半年ほど前に竜堂家から送られてきた若い世話係だ。

もともと花嫁の世話係は、葵の生家から来たキヨとマキノのふたりだった。ふたりとも、三つの頃から葵の身の回りの世話をしてくれていた。

高齢で穏やかな性格のキヨと、淡々としていて仕事を完璧にこなすマキノ。彼女たちとの距離感が、葵には心地よかった。

ところが、半年前にキヨが病気をして世話係を続けられなくなり、まだ若いシノが代わりにやってきた。それも、竜堂の本家から。

新入りのシノは、キヨやマキノと違って、龍神の花嫁と接するための決まり事をきちんと教え込まれていなかった。

明るい性格でおしゃべりなシノは、必要なことも不要なこともよくしゃべる。所作も仕事も大雑把で、葵には少しうるさかった。

「葵様。章介様しょうすけからお着物が送られてまいりました。離縁の雨が降りやんで、葵様を迎える日に、これを着てほしいとのことですよ。ご覧になってみてください」

シノが、持っていた着物を畳の上に広げてはしゃぐ。

「まあ、華やかで素敵ですよ。ね、葵様」

蝶と洋花の模様が入った濃い青色の着物。それは質素な民家の和室の上では、随分

と派手で異質に見えた。

「そうですね。けれど、ひとまずはしまっておいて」

「あまりお気に召しませんでしたか？」

着物をちらっとだけ見て顔をそらす葵に、シノが残念そうに訊ねてくる。

「そういうわけではないけれど……離縁の雨が降ってやむまで、わたしは龍神様の花嫁としての役割を果たさなければいけないから」

「さすが葵様は義理堅くていらっしやいますね。ですが、十六のお誕生日まであと三日なのです。ここを出る準備だって、ちゃんと進めておかねばいけません。葵様の人生はまだこれからなのです。離縁したあとのことを少しくらい考えたって、龍神様はお叱りにはならないと思います」

「……そうね」

気のない声で答える葵に、シノが小さく肩をすくめてみせる。

付き合いの浅いシノのことを、葵はいまいち信用できていなかった。

ここに来る前にシノが仕えていたのは、竜堂章介。そのことが、葵が彼女を信用しきれない一番の要因なのかもしれない。

竜堂章介は葵の再従兄弟で、竜堂本家の三男。最近、帝都軍の大尉に昇級したと聞く。

龍神と離縁したあと、葵は章介のところに嫁がされることがすでに竜堂本家の当主によって決められていた。

長男や次男ではなく三男の章介のもとに嫁がされるのは、上のふたりが既婚であり、世間知らずのワケありを側妻に迎え入れることを嫌がったからだ。

とはいえ、葵と十ほど年の離れている三男の章介にも、上の兄たちと同様にすでに正妻はいる。

そのため、本家の当主が子息の誰かに葵を嫁がせると決めたとき、初めは章介も難色を示していたそうだ。

そんな章介の気が突如として変わったのは、半年前のこと。

竜堂の本家の人間は、年に一度、一族を代表して美雲神社に参拝することが義務付けられている。

参拝の際に、葵は竜堂家の当主とともに美雲神社にやってきた章介に挨拶をさせられた。

通常であれば、龍神の花嫁が俗世の人間に会うことは許されない。

だが、龍神との離縁の時が迫っているにもかかわらず、章介が葵を迎えることを渋っていたため、当主が強引にふたりを対面させた。

葵は、昨今、美雲神社に送られた花嫁の中でも、特に見た目が美しかった。

女好きの章介なら、一目会えば葵を気に入るはず。

おそらく、そういう算段があったのだろう。

当主の目論見通り、その後、章介と葵の縁談が決まった。

龍神との離縁のあと、葵は次代の花嫁を生むために章介の側妻となる。

シノがキヨの代わりに葵の世話係としてやってきたのは、章介との縁談が正式に決まった直後のことだった。

そんな状況だったため、葵にはシノが章介によって送り込まれてきた内通者のように思えてならない。

離縁後の夫となる章介とは、初めて顔を合わせたときに少しだけ言葉を交わした。だが、葵は彼のことをあまり好きになれそうになかった。

十も年が離れているということもあるが、それだけではない。葵のことを品定めするように見てきた章介のねつとりしたまなざしに、不快感を覚えたのだ。

世間をあまり知らない葵でも、結婚は家が決めることで、個人の好き嫌いでどうにかなるものではないことはわかっている。

けれど、章介に嫁いだあとのことを考えれば気が重い。

章介に嫁ぎ直すくらいなら、存在するかどうかもわからない一つ目の龍神の妻のままでいたほうが幾分もマシだった。

「少し庭を散歩してきます」

ため息を吐くと、葵は縁側から美雲神社の庭に出た。



葵の住む小さな民家は、美雲神社の敷地の一番奥にある。

民家から出て少し歩くと、葵の住まいと本社のある場所を分かつ大きな池があった。池の奥まったところから先は森に通じる崖になっていて、そこから雨龍の滝と呼ばれる清流の美しい滝が池へと流れてきている。滝のそばまでは葵もめつたに行かないが、とても神聖な空気の漂う場所で、小さな鳥居と社があった。

その小さな滝壺を中心に広がる池の水面には、ところどころに蓮の葉が浮かぶ。少しくびれた池の真ん中部分には、赤い太鼓橋がかけられていた。

橋のちょうど中央には、濃い灰色の着流しの男がひとり。欄干にもたれてたずんでいる。

肩につくかどうかという長さの白銀の髪、左目を覆うように白い布の眼帯を巻き、少し不思議な空気を漂わせている男は、その名を御蔭と叫んだ。

出会ってもう十年以上は経つが、葵は御蔭がどこに住んでいて、どこから来ている

のかわからない。

美雲神社に由縁があつて池の鯉の世話を任されているようだが、葵の世話係たちは御蔭のことが見えないかのように、いつも無視していた。

聞くと、御蔭は美雲神社の誰とも交流がなく、唯一話すことができるのは葵だけらしい。それを知ったとき、葵は御蔭も自分と同じなのだと理解した。

この国の人にはめずらしい白銀の髪に、青の隻眼。少し変わった容姿の御蔭は、おそらく、葵と同じように美雲神社で隔離され、世間から遠ざけられている者のひとりなのだ。

葵が太鼓橋の袂で立ち止まって見ていると、御蔭がおもむろに着流しの袖に手を入れた。そこから取り出したものを緩慢な動作で池に投げると、鯉たちが集まってきて、水面から一斉に顔を出した。

鯉たちの多くは灰黒で、その中に赤や黄や白の色鮮やかなものもいくつか混ざっている。

見慣れた光景に、葵の頬が少し緩んだ。

鯉たちは、ただ餌を求めてやってきている。そのはずなのに、なぜか御蔭が太鼓橋に立っているときは、鯉たちが彼の指示によつて集められているかのように見える。

昔から、それが不思議で仕方ない。

しばらく立ち止まって、離れた場所から御蔭の横顔をじつと見つめる。

御蔭は、なかなか葵に気付かない。それでも彼を見つめていれば、憂鬱に沈んだ葵の胸が少しだけ軽くなるような気がする。

(あとどれくらい、こうして見つめていられるかしら)

ほんやり考えていると、御蔭がおもむろに葵のほうを振り向いた。

「どうしたのですか。そんなところで立ち止まって」

池の鯉にしか興味がないのかと思えば、御蔭はちゃんと葵の気配に気が付いていたらしい。

「今日はこちらには来ないのですか?」

やさしい声に誘われて、心が躍らぬわけがない。葵の足が前に出る。

「どうぞ」

太鼓橋を渡つて隣に並ぶと、着流しの袖に手を入れた御蔭が、鯉の餌をひとつかみ、葵に差し出してきた。

葵が両手を受け皿にして前に出すと、黒っぽくて丸い鯉の餌がバラバラと落ちてくる。

手のひらに小さな山を作つていく鯉の餌を無言で眺めていると、

「どうしましたか。今日はなんだか随分と浮かない顔ですね」

のんびりした御蔭の音が落ちてきた。

「そんなことないわ。御蔭の気のせいよ」

「……そうですか」

少し遅れて返ってきた御蔭の声はどこか緩慢で、葵を深追いしてこない。

それが淋しい気もするが、どちらかと言えばほっとする気持ちのほうが強い。

御蔭にあまり気を遣わせないように、葵は手の中の鯉の餌をひとつふたつと遠くに投げた。それを追って、数匹の鯉が競うように尾鰭を揺らして泳いでいく。

さらにひとつふたつと投げていくと、しばらく葵の様子を窺っていた御蔭も池のほうに向き直った。それから、袖口からつかみ取った餌を、先ほどと変わらず緩慢な動きで池へと投げる。

声もそうだが、御蔭の纏う空気はいつも穏やかでゆったりとしている。時の流れも彼の周りだけは少し遅いような、そんな気がするときさえある。

餌を投げる手を止めると、葵は御蔭の横顔を再びそっと見つめた。

実際に、御蔭の見た目は葵が三つで出会った頃のまま。ほぼまったくと言っていいほど変わっていない。

小さく頼りなかった葵は、今では大人に近付き美しく成長している。

マキノや、今はここを去ったキヨも、気付けば髪に白いものが混じるようになり、

目尻にはシワができていた。

けれど御蔭は、出会ったときにすでに成人していたにもかかわらず、髪や肌の艶が少しも衰えない。常に変わらぬ姿でそこにあり、成長や老いとは無縁に見える。

昔からずっと、御蔭は見惚れてしまうほどに綺麗だった。

「葵……?」

ついほんやりとしていた葵は、御蔭に呼ばれてはっとした。

いつのまにか開いた指の間から、鯉の餌がぼろぼろと零れて足元に落ちている。

「どうしたのです? やはり体調がすぐれませんか?」

御蔭が前髪を掻き上げるようにして、葵の額に手のひらをあてる。そうして葵の顔色を窺うように、じっと覗き込んできた。

不意打ちの出来事に、葵の頬がぼつと紅潮する。それに合わせて、御蔭がほんの少し眉根を寄せた。

「少し顔が赤いようですが大丈夫ですか? 近頃気温の低い日が続いていますからね。ちゃんと羽織を着て出てこなければいけませんよ。あなたは風邪を引きやすいのだから」

子どものような注意を受けて、葵もきゅっと眉間に力を入れた。

「それは子どもの頃の話よ。最近では風邪なんてめったに引かないもの」

「そうですか。では、なにがあなたの顔を曇らせているのですか」
額に触れていた御蔭の手が、葵の横髪を梳くように流れて離れていく。それを名残惜しく思いながら、葵は小さく唇を震わせた。

自分は龍神の花嫁に選ばれた者。だから、胸の憂鬱など隠し通さなければいけない。そう思っていたのに、日に日に近づく離縁を前に、どうしても抑えた気持ちを感じられない。

「もうすぐ雨が降るから……」

自らの口から零れた言葉が、葵をひどくせつなくさせた。

御蔭は昔から、葵の微細な表情の変化にすぐ気付く。

風邪を引きやすかった葵の体調のことも、よく気遣ってくれる。

けれどただひとつ、御蔭は恋心に関しては鈍い。

額に触れられて、葵が頬を染めた理由に、彼はおそらく気付いていない。

近頃、葵が薄灰色の空にため息ばかり零しているのは、御蔭のせいでもあるというのに。

「泣いているのですか？」

心配そうな声に顔を上げると、御蔭が葵をじっと見ていた。

横に流した絹糸のような前髪から覗く、御蔭の右目。眼帯に覆われていないほうの

彼の瞳は、晴れの日の澄んだ空のように美しく青い。その目がわずかに細められるのを見ながら、葵は喉の奥からせり上がってくる名前もわからない苦しさをぐっと飲み込んだ。

「だって、わたし、もうすぐ十六になってしまふの」

小さな声でつぶやくと、御蔭が目を細めたまま、ゆるやかに口角を引き上げた。

「ああ、あと三日であなたの誕生日ですね」

穏やかな御蔭の声に、感情の揺れはない。そのことに、葵の胸中がかき乱される。

「それだけじゃないわ。十六になったら、龍神様と離縁して、竜堂の本家に嫁がなければいけない……」

「竜堂章介様は、葵の次の結婚相手として決して悪くはないのでしょうか？ 立派な軍人様で、容姿もいと評判だとか」

章介との結婚についての不安を伝えると、御蔭は鯉の餌を池に投げ入れながら、ゆつたりとした口調で葵をなだめた。

「どうやら、章介の噂は御蔭の耳にも届いてきているらしい。」

「もちろん、肩書きは悪くないわ。けれど、わたしはあの方がわたしを見る目が嫌い。まだ一度しかお会いしたことはないけれど、わたしを欲の対象としか見ていないことがはっきりとわかるのだから。今も、龍神様と離縁したあとに着てほしいと華やかな

着物を贈られたのだけど……着物からすら、あの方の下心が透けて見えるようで嫌気が差したわ。まだ龍神様と婚姻関係にあるわたしの機嫌をとろうとする章介様のこと、奥様はどう思っているのかしら」

不快げに、葵が柳眉をひそめる。

二年前に結婚した章介と正妻の間に、まだ子どもはいないらしい。だからこそなおのこと、次代の龍神の花嫁を生むための側妻をよくは思わないだろう。

先代の花嫁である葵の母が、離縁のあとに嫁がされたのも既婚の男のところだった。葵の母は美しく心のやさしい人で、夫となった男はすぐに彼女に強く心を惹かれたそうだ。

長く連れ添った正妻をさしおいて彼女を寵愛し、葵を生む前も、生んだあともそばに置いて離さなかった。そのため、母は正妻にひどく疎まれ、葵が美雲神社に連れてこられてだいぶ経ってから竜堂家を出されたらしい。

そのことを、葵は成長してからキヨとマキノの噂話で知った。

その後の母がどうなったのか。今もどこかで無事であるのか、葵には知る手立てもない。

葵も、章介のところに嫁げば、最後は母のように竜堂家から捨てられてしまうのかもしれない。

葵は、着物の胸元に手をあてた。そこには、幼い頃に母からもらった紫色の袋の御守りが入れている。それは、もう顔もよく覚えていない母と葵とを繋ぐ唯一のものだった。

「結局のところ、花嫁は竜堂家にいいように使われるだけの捨て駒。龍神様と離縁して、章介様の側妻になれば、今度は竜堂の屋敷に閉じ込められる。子を生むまで、あの方の欲を満たすための道具にされる。あの方のところに嫁ぎ直すくらいなら、このまま一生、一つ目の龍神様の妻でいるほうがずっとマシだわ」

「今からそんなに自棄になってどうするのです。あなたが母君と同じ運命を辿るとは限らないでしょう。きつとあなたの母君も、今はどこかで幸せに暮らしていますよ。離縁したあとの花嫁には龍神の加護があるのでしょ？」

「そんなもの信じられないわ。だって、わたしはただの一度だって龍神様にお会いしたことがないんだもの。ここを出たあとは、自由も与えられず、生涯ずっとひとりぼっちになってしまふ。お母様と同じようにはならなくても、似たような目に遭うに決まってる」

御蔭が哀しそうな目をしたが、葵はどうしたって自棄にならずにいらなかった。言葉の口に出せば出すほど、理不尽への怒りや悲しみが込み上げてくるのだ。

「自由がないのは、ここにいるのも同じでしょう」

「でも、ここには御蔭がいるわ」

葵は、御蔭の顔を熱のこもったまなざしで見つめて言った。

葵にとつて、御蔭がどれほど特別な存在か。

まなざしで、声音で、直接言葉にできない想いを訴える。

龍神の花嫁という古いしきたり。そのもとに、美雲神社に閉じ込められてきた葵に自由はなかった。

状況は、龍神の花嫁であっても章介のもとに嫁ぎ直しても変わらない。だが、御蔭がそばにいるのといないのではまったく違う。

出会ってからずっと、葵は御蔭のことを慕ってきた。

淋しさやわがままを無償のやさしさで包み込んでくれた御蔭は、葵にとって親のようであり、時に頼れる兄のようでもあり——この世で唯一、心の内を晒すことのできる特別な存在だった。

必ず毎日会うことができたわけではないが、池のそばまで来ると、なぜかいつも御蔭の気配を近くに感じることができた。

初めは家族や友人に抱くのに近かった御蔭への親愛が、今では少し形を変えて淡い恋心と緬い交ぜになって葵の胸の内にある。

龍神の花嫁として存在しながら、他の誰かに心を寄せる。そのことに少しの後ろめ

たさはあったが、御蔭が幼い葵の淋しさや孤独を拾って慰め続けてくれたからこそ、今日まで無事に花嫁としての務めを果たしてこられた。

葵はそう思っている。

だが、御蔭はどうだろうか。

「わたしがここを出たら、御蔭はどうするの？」

葵の問いかけに、御蔭が「そうですわね……」と少し考え込むそぶりを見せた。その反応に、わずかに葵の頬が引きつる。

ほんの少しだが、葵はどこかで期待していたのかもしれない。

御蔭が淋しがったり、あるいは葵と一緒にここを出たいというような言葉を口にしてくれることを。

「あなたが去ったあとも、私は変わらずここにいますから。鯉たちがいますから。私はこれからも、この者たちを護り続けなければいけません」

池の水面を見つめながら、のんびりとした口調で話す御蔭。

声色のやさしい彼の言葉が、葵の左胸をチクリと刺した。

(御蔭は、わたしがここを去ることを淋しいとは思わないのね……)

彼は、出会ったときから不思議な空気を持つ男だった。

穏やかで落ち着いていて、どんなときも感情の波を荒立てることがない。池の鯉に

餌をやること以外には、何事にも関心を示さない。

葵に対してはずっとやさしいが、それもなにか特別な感情があつてのことではないのかもしれない。

せつなさが込み上げてくるが、御蔭が初めからそういう態度だったからこそ、葵は彼のそばを心地よく感じていたのだ。

もし葵に本音を言うことが許されるなら、龍神との離縁のあとは御蔭のそばで生きていきたい。

それがどんな関係でも構わないから、ただそばに……

だが、古い因習にとらわれた竜堂家の使い捨ての駒にすぎない葵に、なにかを望むことなど許されない。

わかっているが、考えてしまう。

もしほんとうに一つ目の龍神様がいらつしやるのなら、離縁する花嫁の願いをどうかひとつだけでも聞き入れてほしい、と。

「せめて離縁の雨が、一日でも長く降り続きますように……」

薄墨色の空を見上げた葵は、心からの祈りの言葉を零すのだった。

幼時の淡恋^{あわこい}

葵が御蔭と出会つたのは、三つで美雲神社に嫁いできたばかりの頃。

もう十年以上前のことだが、そのときの彼の印象は鮮烈で、今でも葵の胸の中にはつきりと残っている。

龍神の花嫁になるために生まれた葵は、竜堂家で厳しく躰^しけられ、三つになる頃には、大人の言うことをよく聞く物わりのいい子になっていた。

三つの誕生日に母から引き離されて美雲神社に連れてこられた葵は、この日のためにあつらえられたという被布付きの祝い用の着物を着て、龍神との形式上の祝言を挙げた。

美雲神社の小さな民家での祝言に集まつたのは、世話係のマキノとキヨ、竜堂本家の当主のみ。

大きな座布団に座らされた葵の隣。花婿である龍神の席は空いていた。

花婿不在の祝言の席でもっともらしく祝詞^{のりと}を唱える神主の姿をぼんやりと眺めながら、葵はこれから自分の特別なお務めが始まるのだと子どもながらに理解した。

美雲神社に入れば、もう二度と母に会うことはできない。

竜堂家にいるときから、葵は繰り返しそう教え込まれていた。

それでも夜にひとりで寢床に入ると心細く、母が恋しかった。

最後のお別れするとき、母は目に涙を浮かべながら葵をきつく抱きしめて、「これを肌身離さず持つておいてね」と紫色の御守りをくれた。

夜中に布団の中で御守りを手にとってみると、母のことが思い出される。そのたびに、涙が零れて仕方なかった。

美雲神社にやってきてから毎夜、葵は明け方まで眠れずに泣いていた。

目を真っ赤に腫らして起きてきては、虚ろな表情で自室で過ごす。そんな姿を見かねたキヨは、あるとき葵を神社の庭へと連れ出した。

昼間にたくさん歩いてお日さまを浴びれば、夜もよく眠れるだろう。

キヨはそう考えたようだった。

葵がキヨと手を繋いで民家の前の道を下っていくと、しばらくして大きな池が見えてきた。

池の真ん中には、赤い太鼓橋がかかっている。

美雲神社に連れてこられたとき、葵はキヨやマキノと一緒にこの橋を向こう岸から渡ってきた。

池のそばまで来るのはあるとき以来だが、なんだか随分と岸の向こうが遠くに見える。

ほんやりと池を眺める葵の手を引いて、キヨは太鼓橋は渡らずにその前をゆっくりと通り過ぎようとする。それに従い歩いてきた葵は、ふと橋の袂に目を留めた。

池の縁に近い橋の袂に、人がしゃがんでいるのが見えたのだ。

濃い灰色の着流しの男で、髪の色は輝く白銀。それが肩のあたりでさらりと揺れると、太陽の光に反射してさらに輝く。

(綺麗……)

ひさしぶりに、葵の中で感情が動いた。

吸い寄せられるように見つめていると、男が着流しの袖に手を入れて、取り出したものを池に向かっておもむろに投げる。その途端、池の水がバシヤバシヤと泡立った。

何事かと思つて目を凝らすと、男の前に集まってきたたくさんの鯉たちが、水面から顔を出し、バクバクと忙しそうに口を動かしている。

着流しの男が投げ入れたのは鯉の餌。そのときはそうとは知らなかった葵の目には、大群で同じ動きをしている鯉たちの様子がなんだか不気味に見えた。

葵がひゅつと喉を鳴らすと、着流しの男が肩越しに振り返る。その瞬間、葵はおもわず目を見開いた。

彼の右目は、晴れの日の澄んだ空のように美しく青い。葵と似た、とてもめずらしい色だ。

けれど葵が驚いたのはそれだけではない。美しい青と対になる彼の左の目は、白布で巻かれて覆い隠されていたのだ。

そのような人を見るのが初めてで、葵はつい足を止めて見入ってしまった。

「葵様……？」

立ち止まった葵に引つ張られたキヨが、不思議そうに振り返る。

それから、すぐに池のほうに向けられた葵の視線の先に気付いて「ああ……」と気怠げに息を吐いた。葵が池の鯉に気を取られていると思っただけらしい。

しばらくたたずんでみると、葵の視線に気付いた男が、宝石のような青の瞳をふつと細めた。

「おや、めずらしい。あなたには私が見えているのですね」

男がのんびりとした声で話しかけてくる。

なぜそんなことを言ってくるのだろう。

葵が首をかしげたその瞬間、キヨにぐいっと手を引かれた。

「さあ、葵様、そろそろ行きましょう。池の鯉なら、またいつでも見られますよ」

キヨが歩き出したので、葵は男からふいっと顔をそらした。

『龍神の花嫁は、現世の人間と触れ合ってはいけない』

まだ竜堂家にいたときに、しつこく教え込まれていたからだ。

そのあとも、キヨやマキノと散歩に行くと、池のそばで白銀の髪を着流しの男をよく見かけた。

太鼓橋の欄干にもたれていたり、池のそばでしゃがんでいたり。いつものんびりと池を眺めながら、鯉に餌をやっている。

けれど、初めに男の言葉を無視して以来、彼のほうから葵に話しかけてくることはなかった。

もちろん葵も、キヨやマキノの前で男に話しかけることなどできなかった。

「ねえ、キヨ。あそこの池のところにいる方は誰？」

ある日の散歩中、葵はついに気になって太鼓橋の袂を指差して訊ねた。

ゆつくりと葵の指すほうを見たキヨが、次の瞬間、すつと無表情になる。

「池のところにいる方とは？」

「いるでしょう、橋の上に。銀色の髪の男の人」

まだ少し舌足らずな葵の話に、キヨはあからさまに眉をひそめた。

「そんな方はおりませんよ、葵様」

「よく見て。あそこにいるじゃない。いつも橋の近くにいて、あの方がなにか投げると、お魚がたくさん集まってくるのよ」

「葵様」

キヨの厳しい声に、小さな葵の肩がビクツと跳ねる。

「池のそばに人がいたことなど、今までに一度もございませぬ。お淋しい気持ちはわかりますが、あなたは龍神様の花嫁としてここにいます。戯言はお控えください」

低い声で諭されて、葵は悲しい気持ちになった。

自分は、決して嘘をついているわけではないというのに。

後日マキノにも確かめると、キヨほど強い言い方ではなかったが、

「戯言はいけませんよ、葵様」

と困ったような顔でたしなめられた。

白銀の髪を着流しの男は、確かに池の太鼓橋のそばにいる。それなのに、キヨもマキノも彼のことを「いない」と言う。

何度伝えても戯言はいけないと咎められ、そのうち葵もふたりに信じてもらうことは諦めた。

そうしてキヨたちと散歩に出るたびに、池のそばにいる男の姿を遠くからぼんやり

と眺めていたのだった。



それから月日が経ち、六つになったとき。葵はようやく、池の橋の向こうには渡らないことを条件に、神社の庭をひとりで散歩することが許された。

葵が池のほうへと向かうと、銀髪を着流しの男が、初めて会ったときと同じように、太鼓橋の袂にしゃがんで鯉に餌をやっていた。

少し離れたところから見ていると、男が袖口から手を入れてつかんだものを葵に向かつて差し出してきた。

「あなたもやってみますか？」

さらりと揺れた前髪の向こうから、澄んだ青の瞳が葵をやさしく見つめてくる。

咄嗟に左右に頭を振ると、男が「そうですか」と、つかんでいたものを池に投げた。

そこに池の鯉たちが、一斉に群がってくる。

水面に顔を向けて、パクパクと一様に口を動かす鯉たちの群れ。その様子をやはり少し不気味に思いながら眺めていると、男が訊ねてきた。

「今日はおひとりですか？」

初めて会ったときに無視をして以来、男が葵に話しかけてくることはなかったし、視線が交わることもなかった。それなのに、突然どうしたというのだろう。

葵の胸に、今までに感じたことのない緊張が走る。

龍神の花嫁として美雲神社にやってきてから、葵はキヨとマキノ以外の人間と話したことがないのだ。

けれど、ここで無視したら、男はもう二度と葵に話しかけてはくれないかもしれない。そう思うと、なぜかせつないような、もったいないような気がする。

着物の衿元に手をあてると、葵は鼻で小さく呼吸した。

「……む、六つになったので」

普段よりも動悸がして、言葉が少しつつかえる。

「なるほど、もう六つになれましたか」

すると、ゆるりと口角を上げた男が、なぜか感慨深げに頷いた。

会話をするのはこれが初めてなのに、男はまるで葵のことを前からよく知っているような口ぶりだ。

不思議に思っただけで、男が一度腰を上げ、葵の前で膝をつきなおす。

「ご挨拶が遅れましたね。私の名前は御蔭です。もう随分と長い間、この美雲神社におります。あなたは？」

同じ目線の高さで御蔭に見つめられて、幼い葵の胸は戸惑いに揺れた。

左目を白布で覆っていても、御蔭は美しく整った顔立ちをしていて、子どもの葵でもおもわず見惚れるほどだった。

葵がじっと見ていると、御蔭が、「ああ……」とつぶやいて左目の眼帯に触れた。

「これが気になりますか？」

葵がこくりと頷くと、御蔭がわずかに秀眉を下げる。

「こちらは目が悪いので、はずすことができないのです」

御蔭の言葉に頷きながら、葵は少し残念に思った。見えている部分だけでも充分に美しい御蔭の素顔は、ほんとうは、きつともっと美しいだろうから。

「わたしの名は葵といえます。この神社の一つ目の龍神様の花嫁です」

「葵ですか。いい名ですね」

少し緊張の解けた葵が名乗ると、御蔭がふっと笑う。その笑みは美しく不思議な妖艶さがあった、幼い葵の胸を、また戸惑いに揺らすのだった。

初めて御蔭と言葉を交わした夜、葵はキヨとマキノにひさしぶりに彼のことを話した。

だが、世話係のふたりはそれぞれ呆れ顔で、

「まだそのようなことをおっしゃるのですか」
 「そのような人、この神社の敷地内にいらっしやいません」
 とため息を吐いた。

「仮にそのような人がいたとしても、葵様から話しかけてはいけません。それが龍神様の花嫁のしきたりですよ」

キヨに厳しく念を押され、葵は無言でうつむく。

花嫁のしきたりについては、ここに来る前から何度も叩き込まれている。

けれど、葵はどうしても御蔭のことが気にかかり、次の日も会いに行ってしまった。池のそばまで歩いていくと、御蔭は昨日と同じ姿で、太鼓橋の欄干にもたれてぼんやりと歩いていた。

やはり、御蔭の存在は幻などではない。

すぐに走り寄りそうになったが、キヨの言葉が耳に蘇り、葵は一瞬踏みとどまった。『そのような人がいたとしても、葵様から話しかけてはいけません。それが龍神様の花嫁のしきたりですよ』

花嫁が現世の人と触れ合えば、龍神に力を与えることができなくなってしまふ。

葵はまだ一度も龍神に会ったことがない。竜堂家の一部の人間や美雲神社の神主に下りてくるという神託もまだ聞いたことがない。それでどうやって龍神が花嫁から

力を得ているのかもわからないが、それでも、小さな頃から刷り込まれた「しきたり」という言葉に逆らえなかった。

着物の袖をぎゅつとつかむと、太鼓橋に背を向ける。そのまま民家のほうに駆け戻ろうとしたとき、のんびりとした穏やかな声に呼び止められた。

「もう戻られるのですか？」

はっとして振り向くと、御蔭がやさしく手招きしてくる。

「こちらに来て、一緒に鯉の餌やりでも」

御蔭の誘いに、葵は無言で小さく首を横に振った。キヨに話してはいけないと言われたからだ。

けれど、葵は着物の袖を強く握りしめたまま、立ち去ることができなかった。現世の人間との触れ合いは許されない。

それなのに、どうしても御蔭に心惹かれてしまふ。

たぶん、一目見たときからずっと、葵は御蔭に惹かれている。

その場から動くことができずにいると、突然、葵の足元に黒い影がゆらりと落ちた。顔を上げると、太鼓橋の中央に立っていたはずの御蔭が、いつのまにか葵の前にいる。

驚いて目を睜ると、御蔭が葵の小さな手をとって地面に膝をついた。

「しきたりのことを気にされているなら大丈夫ですよ。私はこの人たちには見えていないようですから」

御蔭が、青の右目を細めてふっと微笑む。

やわらかだが、どこかつかみどころのない笑みに、葵の胸がざわついた。

「でも……御蔭はずっと前からここにいてでしょう。それなのに、キヨやマキノが御蔭はいないと言うの」

葵がつい言葉を漏らすと、御蔭は青の瞳を少し淋しそうに翳からせた。

「それは仕方がないことなのですよ。私に気が付いてくれたのは、これまでにただひとり。葵だけです」

ゆつたりと穏やかなのに、どこか憂いを感じさせる御蔭の声。それに気付いた葵は、わずかに頬を強張らせた。

「もしかして……その目が他と違うせい？」

白布で覆った左目を窺う葵に、御蔭は肯定も否定もしなかった。

「あなたはとても美しいのに……」

「葵はおかしなことを言いますね。そんなことを言う人間は、あなたが初めてです」
御蔭の浮かべた淡い笑みが、葵の胸をせつなくさせる。

世の中では、少し人と違う容姿をしているだけで冷たくあたられたり、見えないも

ののように扱われたりすることがある。幼心に、葵はそのことを知っていた。

御空色の瞳で生まれ、龍神の花嫁として美雲神社に閉じ込められた自分や母がそうだ。冷たく扱われて、虐げられている側。

そして御蔭は、きつと自分と同じ側の人間だ。

幼い頭で、葵は御蔭のことをそういうふう^にに理解した。

御蔭は誰にも見えない存在。だから、彼と触れ合うことは、龍神の花嫁としてのしきたりには反しない。

少しの後ろめたさを言い訳の中に押し込めて、葵はそれから御蔭に会いに行った。御蔭と過ごす日々は、とても楽しかった。

キヨやマキノは、歩きやすく整った道しか散歩させてくれなかったが、御蔭は葵が道をそれて森の中に入ることを許してくれた。

花を摘んだり、木の実を拾ったり。池の周りの森の中には、葵の知らなかった珍しいものがたくさんあった。

御蔭は、葵が行きたがる場所に快く付き合ってくれたし、摘んだ花で冠を作って渡したときもやさしく微笑んでくれた。

龍神の花嫁として一線を引いた態度をとるキヨやマキノと違って、御蔭はそのときどきの葵そのものを受け入れてくれる。それが嬉しかった。

キヨやマキノに叱られるため、あまり長くは出かけられなかったが、御蔭と過ぐす時間は、孤独で淋しかった葵の心をゆつくりと満たしていった。

◆ 「先日、紫^{ゆかり}様が家を出されたそうです」

そんな話を耳にしたのは、葵が十二を過ぎた頃。

散歩から帰ると、キヨとマキノが台所でひそひそと話をしていたのだ。

紫というのは、葵の母の名前。

台所から聞こえてくる噂話に、葵は耳をそばだてた。

葵の母は嫁ぎ先の主人に気に入られていた。だが、そのせいで、正妻には疎まれていたらしい。

葵のもとには決して届くことのない外の世界の情報が、キヨやマキノには知らされているようだった。

家を追い出された母は、その後どうしたのだろうか。

どこかに身を寄せるところはあるのだろうか。

母の身を案じて御守りに手を当てた葵は、ふと、小さな頃にキヨが寝る前に聞かせ

てくれた物語のひとつを思い出した。

美雲神社の雨龍の滝のそばには、一つ目の龍の鱗を納めた小さな社が置かれている。龍神の一部である龍の鱗は、不思議な力で持つ者の身を守るといふ。そんな伝承のよな話だ。

実際の雨龍の滝は、庭の池の奥まった場所にあり、周囲は木々で囲まれている。

龍神様がいるとしたらここに違いはないと思えるような、神聖な雰囲気のある場所だ。かつてはそこで龍神の花嫁が祈りを捧げていたこともあったと聞くが、今はすっかり荒れてしまっていて、なんとなく奥までは足を踏み入れがたい。

葵も一度近くまで行ったことがあるが、滝壺までは近付けなかった。

けれど、あの場所で願えば、母を守ってもらえるかもしれない。

そう思ったら居ても立ってもいられず、葵は民家を飛び出した。

池の太鼓橋のそばを通るとき、御蔭の姿は見られなかった。

もし会えれば、雨龍の滝のそばまで一緒に来てもらいたかったが、仕方がない。

途中で見つけた野花をひとつ手折って、池の奥の滝へと急ぐ。

雨龍の滝のそばは、おもわず身震いしてしまうほど空気がひんやりと冷たかった。

ところどころに木の根っこや岩肌が見えている社までの道は、滝の飛沫^{しぶき}で濡れていて滑りやすい。

手に持った花を落とさないようにしながら、葵は草履ぞうりの足裏に力を入れて一歩一歩慎重に進んだ。

けれど、あと数歩で社に辿り着こうというとき、つるんと滑って尻餅をついてしまう。その拍子に手から離れた花が、運悪く、ぬかるんだ地面に落ちて汚れてしまった。

「どうしよう……」

葵が泣きそうになったとき、ガサツと背後で物音がした。

振り向いた瞬間、驚く。そこにはなぜか、御蔭の姿があったのだ。

「大丈夫ですか？」

ゆっくりと歩み寄ってきた御蔭が、茫然と座り込む葵に手を差し伸べる。

「どうして御蔭がここに……？」

「こちらに急ぐあなたの姿が見えたので、気になって追いかけてきました。こんなところひとりで来るとは……なにかあったのですか」

泥濘ぬかるみの花に視線を向けた御蔭が、葵の前でおもむろにしゃがむ。

同じ目線の高さで見つめられたその瞬間、葵の目からぼろりと涙が落ちた。

母への想いと花をだめにしてしまった悲しさ、御蔭が来てくれたことの安心感。ぐちゃぐちゃに乱れた感情が、涙になって次々と零れてくる。

「御蔭……」

縋すがりつくように着流しの袖をつかむと、御蔭が葵の頭をやさしく撫でてくれる。そうされると、少しずつ気持ち落ち着いていくような気がした。

「お母様が家を追い出されてしまったみたいなの。だからわたし、心配で……」

「それで、母君のことを守ってもらうように願いに来たのですか」

「……でも、お花をだめにしてしまったの」

「大丈夫ですよ。それなら私がついてきます」

ふっと右目を細めた御蔭が、背中隠していた白の野花を差し出してくる。

「どうして御蔭が……？」

「言ったでしょう。こちらへ急ぐあなたが見えたので追いかけてきたのだと。あなたが困っているなら、私はいつでも力になります」

穏やかだが頼もしい御蔭の言葉に、葵の胸がとくと鳴った。

「さあ、一緒に社に参りましょうか。ここの龍神は、きっとあなたの母君を守ってくれるでしょう」

なにか根拠があるわけでもないのに、御蔭が言うならきつとそうであるような気がする。

御蔭が葵の手を引いて、雨龍の滝の社の前へ進む。そこに白い花を置くと、ふたりで寄り添って両手を合わせた。

「どうか、お母様をお守りください」

願いを唱えて横を見ると、御蔭は手を合わせながら古い社を無表情で見ている。

神聖さの漂う場所で、御蔭の横顔はいつにも増して美しく、葵の胸をざわつかせる。御蔭のそばにいと、葵の心は満たされる。けれどときどき、今のように胸がざわざわとして、せつない気持ちになることがあった。

御蔭を見つめて「綺麗だ」と思うときほど、葵の胸はきゅっと押し潰されるように狭くなる。その感覚が、この頃、特に増している。

「戻りましょうか。あなたの帰りが遅いことを心配して、世話係のおふたりがそろそろ探しに来るかもしれません」

葵の視線に気付いた御蔭が、ふと表情をやわらげる。

雨龍の滝を出て太鼓橋のほうに歩いていると、向こうからマキノがやってきた。

「葵様、どちらへ行かれていたのです」

御蔭の言う通り、散歩からなかなか戻らない葵を探しに来たらしい。

「まるで予言したみたいだね」

「偶然でしょう。どうぞ、私のことは気にせず行ってください」

葵のつぶやきに、御蔭がくつりと笑う。

「でも……」

「私のことならご心配なく。またいつものようにあなたを待っていますから」

「約束よ」

「約束です」

やさしい声音に、葵の胸がとくと鳴る。

御守りを押さえるように袷元に手をあてると、御蔭がそっと葵の背を押してきた。

マキノとの距離は徐々に狭まり、葵は少し名残惜しい気持ちで御蔭に袖を振る。

「おひとりどこまで散歩に行かれていたのですか、葵様」

御蔭から離れて走っていくと、マキノが葵の着物の裾の汚れに気付いて顔をしかめた。

（ひとりではなかったのだけれど……）

苦笑いを浮かべながら、葵は小さく肩をすくめた。

葵が御蔭とふたりで歩いてきたところをマキノも目にしたはず。それなのに、御蔭についてなにも言わない。相変わらず、御蔭のことは見えていないフリをしているようだ。

駆けてきたほうを振り向くと、御蔭はもうどこかに姿を消していた。

池の縁へと下りていってしまったのだろうか。

普段はのんびりしているくせに、御蔭はときどき姿を消すのがとても早い。

途端に、さっきまで近くに感じていた御蔭が幻だったように思えて淋しくなる。
 (早くまた御蔭に会いたい……)
 そのとき葵の胸に芽生えたせつなさは、おそらく淡い恋心だった。

離縁の雨

葵の十六歳の誕生日に日付が変わると、凶ったかのように雨が降り始めた。

龍神が、花嫁との離縁を報せる——通称「離縁の雨」だ。

雨は三日三晩、一時も途絶えることなく降り続け、長年仕えた花嫁に加護を与える。そして、龍の眷属である竜堂家には富と繁栄をもたらすと言われている。

葵が十六歳になる日に降り始めた雨も、古くからの伝承通りだった。

一日目はしとしとと穏やかだった雨は、夜になるにつれて激しくなり、二日目には雷も轟くほどの豪雨となった。

雨脚は弱まることはなく、三日目も地面を打ちつける雨の音と雷の音が響いた。

葵の住む古い民家は激しい風雨でガタガタと揺れ、雨がやむ前に家が壊れてしまうのではないかと不安になるほどだった。

だが、やむ気配のない大雨がどれだけ降ったとしても、四日目の朝は必ず晴れる。

離縁の雨とはそういうものであるらしく、シノもマキノも平然とした顔で、普段通りに葵の身の回りの世話をしていた。

雨が降り始めてから、葵は御蔭のことが気になっていた。激しい雨が三日も降り続けば、庭の池の水位が増して氾濫するかもしれない。まさかこの豪雨の中で餌やりなどしてはいないと思うが、いつも池の鯉を気にかけている御蔭のことだ。様子を見るために池のそばまで行っている可能性はある。池に落ちたり、危険な目に遭ったりしてはいないだろうか。

それ以前に、御蔭は風雨をしのげる安全な場所に住んでいるのだろうか。十年も交流を持ってきたというのに、御蔭について、肝心なところがなにひとつわからない。

気になって何度か外に出ようとしたが、そのたびに、葵はマキノとシノに見つかり止められた。

「こんな雨の中、外に出るなど危険です。雨がやめば、章介様が迎えに来られるのですよ。大事なお身体に傷を付けたら、お風邪を引かせてしまつては、私たちが叱られてしまいます」

シノにそう言われて、葵はひどく複雑な気持ちになった。

離縁は正式に成立しておらず、葵はまだ龍神の花嫁だ。

それなのに、あたりまえみたいに次の嫁ぎ先の話をされることが悲しい。

葵は家の都合のためだけに存在する体のいい人形なのだ。

雨が降り始めて三日目の夜。葵は悲しみとせつなさで胸を痛めながらも、美雲神社を去る覚悟を決めて眠りについた。

ところが……どういうわけか、四日目の朝を迎えても、雨は降り続いていた。

花嫁の誕生日から、三日過ぎても雨がやまない。

これは長年龍神に花嫁を捧げてきた竜堂家にとって、初めての出来事だった。

異例の事態に驚いた竜堂家の当主は、書庫に保管してある古い文献をいくつも漁ったようだ。

だが、どれだけ調べても、過去に離縁の雨がやまなかったという記録はみつからない。

それから五日が過ぎ、一週間が過ぎても、離縁の雨はやまなかった。

雨は時に弱まったり激しくなったりしながら降り続き、ついには十日が過ぎたのだ。降り続く雨は、美雲神社の外でひどい水害をもたらした。

川の増水や氾濫、家への浸水、田畑や家畜の損害。そういうことに困った人たちが、美雲神社に押しかけてきた。

多くの人が、雨がやまないのは一つ目の龍神が暴れているせいだと思っていた。

「龍神様を鎮めろ」

「なぜ龍神は花嫁と離縁をしないんだ」

人々の怒りはすべて美雲神社にぶつけられ、対応に困った神主は、葵のところへやってきた。

「花嫁様のお力でなんとかありませんか。雨をやませることができないのなら、せめて外に出てきて、村の人々に事態の説明をしていただきたい」

民家の玄関先で、神主が懇願する声が聞こえる。

美雲神社の神主とは、葵が三つでここに連れてこられたときに話したきり。それ以降は、一度も会っていない。

しきりに従い葵を避けていたのだろうが、それにしてもずっと人目につかないところに閉じ込めておいて、こんなときはばかり「出てこい」とは、ずいぶん虫がいい。

「葵様はお会いになりません」

マキノが玄関のところで食い止めているが、それもどれくらい保つだろう。

神主が民家の奥へと乗り込んでくれば、無理やりにも葵を民衆の前に引き出すかもしれない。

龍神の花嫁とは名ばかりで、葵に特別な力はない。

神託が下ったことは一度もないし、当然、雨を止めることもできない。

それがわかれば、人々の怒りは増すかもしれない。

葵は縁側に立ってかけてあった蛇の目傘を手にとると、マキノや神主たちに気付かれ

ないようにこっそりと外に出た。

しとしとと降り続く十日目の雨。

雲に覆われた鈍色の空は、まだしばらく晴れそうもない。

縁側から外に出た葵は、誰にも見つからないように庭の池へと向かった。

十日降り続いた雨のせいで、庭の地面はひどくぬかるみ、足場が悪くなっている。道には大きな水溜りができ、道の脇には泥水が細い川のように流れていた。

晴れていれば五分も経たず辿り着くことができる池への道のりも、雨のおかげで困難だ。

着物の裾を濡らしながらようやく池のそばに辿り着くと、太鼓橋の真ん中で、御蔭が傘も持たずに天を見上げていた。

雨に打たれることなど気にも留めず、どこか虚ろな目で鈍色の空を見つめる御蔭。

濡れて顔に張り付いた白銀の髪は、陽の光もないのにまばゆく輝いて見える。御蔭の横顔は、こんなときも見惚れてしまうほどに美しかった。

立ち止まった葵が息をも止めていると、一匹の鯉が池の中でパシヤリと跳ねる。その音に振り向いた御蔭が、太鼓橋の袂にたたずむ葵に気が付いた。

「こんな雨の中、どうしたのですか？」

ずぶ濡れになっていながらもかわらず、御蔭がいつもと変わらぬ様子で葵に話しかけてくる。

速足で太鼓橋を渡ると、葵は御蔭に傘を差した。
「それはこっちの台詞よ。御蔭こそ、雨の中でなにをしているの。外に出られない間もあなたのことがずっと気になっていたのよ。こんなに濡れて……風邪を引くわ」
心配する葵を、御蔭が憂いを帯びた表情で見下ろしてきた。

鈍色の空の下、御蔭の澄んだ青の瞳が、そこだけ唯一の晴れ間のようにも見える。それをじっと見つめる葵に、御蔭がふっと笑いかけてきた。

「私は大丈夫ですよ。この長雨なので、池の鯉たちが心配で……」

そう言って、御蔭が池のほうに視線を動かす。

十日続く雨で池の水は嵩を増し、今にも溢れ出しそうなところをぎりぎり堪えていた。

この池の中で、鯉たちはどうしているのだろう。

先ほど一匹跳ねるのを見たが、他の鯉たちは水底で静かに身を潜めているのだろうか。

「それにしても、やみませんねえ」

池の水面をぼんやりと見つめながら、御蔭がつぶやく。

左目を覆う白布や着流しは濡れ、白銀の髪からは流れるように水が滴っている。それでも、御蔭が気にかけるのは池のことだ。

十六歳の誕生日から降り続く雨に不安を覚えながら、葵が気にかけていたのは御蔭のことはかりだったというのに。はたして御蔭はどうだっただろう。

離縁の雨がやまない十日間、一度くらいは葵のことを想ってくれただろうか。胸の奥がざわつくのを感じて、葵は傘の柄をぐっと握りしめた。

「このままやまなければいいわ。雨なんて……」

竜堂家が、美雲神社の外の人々が、池の中の鯉が。誰がどう困ろうと、葵には関係のないことだ。

決して清くはない、葵の気持ち。

雨音に消されるほど小さくつぶやいたつもりだったが、

「そうですねえ」

なぜか、御蔭は葵の声をしっかりと掬い上げた。

池の水面を見つめていた御蔭が、唐突に振り向く。

不意を突かれ、どくと胸を鳴らす葵に、御蔭は青の右目を細めてみせた。

「葵の言うように、このまま雨が降り続けるのもいいかもしれません」

「え……?」